

## うわべか真実か、信仰、そして魔笛

立教池袋中学校・高等学校チャプレン マーク・シュタール

「今の時代を何にたとえたらよいか。広場に座って、ほかの者にこう呼びかけている子供たちに似ている。『笛を吹いたのに、踊ってくれなかった。葬式の歌をうたったのに、悲しんでくれなかった。』」（マタイによる福音書 11 章 16～17 節）

イエスは伝道の初期、バプテスマのヨハネと比べられ、民衆は誰が本当のメシアなのかといぶかりました。このみ言葉で、イエスはうわべに騙されて、真実を見失わないように、と人々に警告しています。知恵や知識の裏付けのない信仰は危ういものだとことです。揺るぎない信仰を保つことは簡単なことではなく、コロナ禍にあって今、改めて試されている私たちです。そんな時、聖書は私たちの一番の心の拠り所となりますが、私は聖書以外からもインスピレーションを得るようにしています。例えば、オペラなどです。うわべと真実にずれが生じた時に信仰を固く保つことの難しさを巧みに表現したオペラを1つ紹介したいと思います。

それは、今日、最も優れたオペラの1つとして受け継がれているモーツァルトの『魔笛』です。魔笛の初演は、ちょうど230年前、1791年9月30日のウィーンにおいてでした。モーツァルト早世の2カ月前のことです。

まず、そのあらすじを簡単に紹介したいと思います。第一幕：夜の女王に仕える3人の侍女が若き王子タミーノを大蛇から守ります。鳥刺しのパパゲーノは自分が蛇を退治したのだと吹聴します。タミーノは目を覚ますと、夜の女王の娘パミーナが悪魔サラストロに連れ去られたと聞き、自分が助けに行くと誓い、パパゲーノはその助っ人となります。

侍女たちはタミーノに魔法の笛を、パパゲーノに魔法の鈴を授けます。しかし、サラストロの神殿に着くと、タミーノは、サラストロは実は良識ある権力者で、夜の女王こそが悪者であると知ります。第二幕：タミーノは、パミーナを射止めるために試練に挑む決心をします。パパゲーノも妻を得るためにしぶしぶ同意。一方、夜の女王は娘パミーナに短刀を授け、サラストロを殺すよう指示します。混乱するパミーナに、サラストロはこの聖なる場所では愛こそが勝ると諭します。しかし、タミーノは沈黙を誓ったので、パミーナと話すことができず、彼女は絶望し自害しようとしませんが、やがて2人は結ばれ、共に火と水の試練に向き合います。一方、パパゲーノもパパゲーナに出会います。夜の女王一味は、サラストロの神殿を攻めるも稲妻に阻まれます。サラストロの勝利を高らかに歌いつつ、オペラは幕を閉じます。

物語は誰にでもわかりやすく、モーツァルトの音楽もシンプルですが、メッセージは痛烈で精神的な学びが得られます。うわべと現実とずれが生じた時に信仰を保つことの難しさ、というテーマが魔笛をひとつに結び合わせています。では、そこに凝らされた技巧、要素を2つだけ見てみましょう。

1つ目は、1700年代にヨーロッパを席捲したフリーメイソンの影響です。端的に言えば、フリーメイソンは、救いへ導く唯一の権威として君臨する教会の姿に疑問を呈したのです。確立された教会は薄っぺらで腐敗しているとし、新しい真実を提起しました。啓蒙思想的な、宗教とは切り離された道徳を信奉することです。モーツァルト自身もウィーン

にあるカトリックの啓蒙主義者が集う小さな会に加わりました。両者に忠誠を誓うことは矛盾するように見えますが、モーツァルトは生涯を通して、敬虔なカトリック教徒でありつつ、熱心な啓蒙思想者であり続けました。魔笛では、多くの場面でシンボルや儀式にフリーメイソンの要素が色濃く反映されています。フリーメイソンでは、三位一体、フリーメイソンの3階級（徒弟、職人、親方）を示唆する「3」という数字が重要な意味を持ちます。魔笛では、3人の女性、3つの霊、3人の奴隷、神殿への3つの扉、三大美德（不動、忍耐、沈黙）などで3という数字が多用されています。しかし、魔笛の深層テーマを理解するのに、これらの暗示を理解する必要はありません。

モーツァルトは、魔笛の中で信仰の荘厳さを表現するために16世紀のルター派のメロディーを採用しました。それは、モーツァルトが教会音楽に立ち返ったということ、またフリーメイソンも聖書からインスピレーションを得ているということを表しています。聖書からのインスピレーションは、とりわけ第二幕でタミーノとパミーナが生まれ変わるために、共に水と火の試練を受けるシーンで示されています。

「水の中を通るときも、わたしはあなたと共にいる。大河の中を通っても、あなたは押し流されない。火の中を歩いても、焼かれず炎はあなたに燃えつかない。」（イザヤ書43章2節）

うわべと真実にずれが生じた時に信仰を保つ難しさというテーマを浮き彫りにしている2つ目の技巧、要素としては、神秘主義があります。魔笛には多くの神秘主義が用いられており、詳しくは触れません。しかし、最も象徴的なのは魔法の楽器、魔笛と鈴です。注

目すべきは、それらが女王の侍女たちからタミーノとパパゲーノに託されたことです。元々は、悪者を退治するためでしたので、笛も鈴も良きもののシンボルでした。しかし、真の悪者はサラストロではなく、女王だと知るにつけ、笛も鈴も悪しきものに違いないと考えたのです。ここから見えることは、楽器は神秘のシンボルでありながら、その魔力は使い道で良くも悪くもなるということです。同じように、私たち一人一人に与えられた神様からの賜物もそのように見るができます。それぞれに与えられた賜物は、利己的にも利他的にも用いることができます。そして、その重要な選択はまさに私たちに委ねられているのです。

魔笛の中の人々は、終始うわべに惑わされ、後に真実を知ることになります。タミーノは正気を取り戻した時、自分を助けたのはそこを走り回っていたパパゲーノだと信じ込みます。その後、彼は女王と3人の美しい侍女たち一味を信じ、悪の帝国だと知らされた神殿に攻め込みに行きます。同時に、サラストロがパミーナを誘拐したと信じ込まれます。サラストロもまた、か弱い王女に見えたパミーナが実は強い芯の持ち主だと知りません。彼女はタミーノと共に戦う勇気も力も備えていました。沈黙と忍耐が、荒れ狂う嵐を打ち負かす力があることも証明されます。

イエスが笛の力を借りて人々を諭したように、魔笛もうわべに惑わされ真実を見失う私たちに洞察を与えています。私たちも、まやかしや情報操作、他者の主張を鵜呑みにしない姿勢が大切です。そして、予期せぬ真実が現れた時、目が開かされた時には、それを受け入れる柔軟性を備えたいものです。